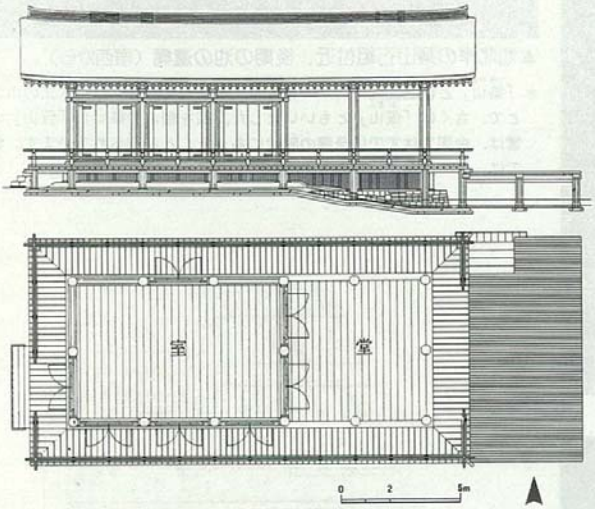
●建物復原の考え方

発掘調査で見つかった建物跡の上屋構造はどのようにして推定復原されるのでしょうか。疑問に思う方も多いかもしれません。

まず建物跡によって平面が確定し、雨落溝があれば軒の出もわかります。軒の出がわかれば、軒先の組物もおよそ想像できます。このほか、井戸の枠板や溝の堰板に転用された建築部材、柱穴にのこる柱根、10分の1縮尺の建築模型部材などの出土資料が、復原にあたっての第一の情報源となります。加えて、奈良県内には飛鳥・奈良時代の古建築が30棟ほど現存しているので、それらの構造・意匠・部材寸法などを参照したり、文献史料や平安時代の絵図をも視野に入れながら、建物の復原を進めてゆきます。

大面取りを施した八角柱の出土状況（第99次）



中央建物の立面図と平面図

●中央建物の復原

桁行5間×梁間2間の身舎（建物の中心部分）の四周に縁をまわした東西棟建物です。大部分の柱は礎石建ですが、四隅の柱のみ深い柱穴をともなう掘立柱としています。西側3間の部分だけ、地下に特別な地盤固めをしているので、そこを閉鎖的な「室」、東側2間を池と連続する開放的な「堂」と考えました。また、この間取りは、法隆寺伝法堂前身建物とよく似ていることから、原則として部材寸法や構造形式は、これにしたがって復原しました。さらに、南東隅にのこる柱が、角柱の四隅を切りおとした「大面取り」の柱であったことから、平等院鳳凰堂など、面取り部材を用いた古代の現存建物を参照して、部材のほとんどに面取りを施しました。

●北東建物の復原

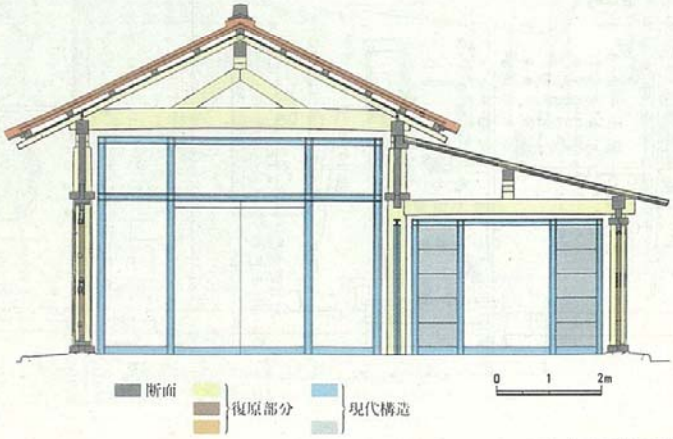
庭園の北東にある桁行3間×梁間2間の礎石建の東西棟建物です。円柱を受ける平らな彫り出し（円柱座）をもつ礎石が出土しており、これから柱の直径が41.4cmと推定できました。池の北に建つ「亭」のような施設と考え、開放的な空間構成の法隆寺食堂を復原の見本とし、東西の妻面のみが壁で南北は吹き放しとして復原しました。

北東建物（南西から）

円柱座付き礎石（第110次）

●西建物の復原と活用

桁行7間×梁間2間の身舎に西庇のつく掘立柱の南北棟建物です。東院南門と玉殿をつなぐ道路の脇に設けられた「控の間」のような建物で、本来は庭園とは関係ない施設です。しかし、復原事業では、西側の駐車場から庭園内に導入するためのエントランスおよび管理施設として位置づけ、整備しました。これらの現代的機能もみたすよう、構造体を古代建築として復原しつつ、内部では鉄骨やガラスなどの新建材を多用し、復原部分と現代的機能空間が一見して区別できるように工夫しました。このように現代的機能を兼ね備えた復原建物の建設は、平城宮跡では初めての試みです。



西建物東西断面図

図Ⅰ-15　パンフレット「平城宮　東院庭園」－3